〈研究報告〉

周産期に子どもを亡くした経験をもつ母親の次子の育児の特徴
― 上子との育児の違いを通して ―

伊藤静香[1)]　蛎崎奈津子[2)]
1）東京医科大学病院　2）岩手県立大学看護学部

要旨

周産期に子どもを亡くした経験をもつ母親の語りから，子どもの喪失を経験した後の次子の育児にどのような特徴があるのかを明らかにすることを目的に，上の子と次子との間に新生児・乳児死亡を経験した母親２名を対象に半構造化面接を実施した.

その結果，周産期に子どもを亡くした母親の次子の育児の特徴として，【悲嘆過程とともに育児をしている】をコアカテゴリーとした【また亡くすという不安の中で育児する】，【亡くした児を重ねて一緒に育児する】，【上の子を思いながら育児する】，【命の大切さを誰よりも知ってほしいと願いながら育児する】という一般的な経産婦の育児とは異なる特徴を表す４つのカテゴリーが見出された．周産期に子どもを亡くした経験をもつ母親は，悲嘆過程のなかで複雑で不安定な気持ちを抱えながら子どもたちの育児を行っていた．次子の妊娠期から育児期にわたっての継続的な支援の必要性が示唆された.

キーワード：周産期の喪失，次子の妊娠，育児，悲嘆過程

はじめに

母親にとって新たな命をお腹に宿し，その命を失うことは耐えがたい苦痛であり，自分のお腹の中で育ててきた大切なわが子を亡くすという経験は長く親のなかにあり続ける．実際、著者が流産・死産・新生児死亡を体験した家族のセルフ・ヘルプグループの会に参加した際には，ほとんどの母親が亡くなった子どもは自分のなかに生きており，ずっと自分を見守ってくれていると話していた．またそのような気持ちは，次子が産まれたあともずっと続いており，次子を亡くなった子どもの生まれ変わりなのではないかと思ったと話す母親もいた．一般に周産期に子どもを亡くした母親がすぐに次の妊娠を考えることは珍しいことではなく，これはこのような母親特有のニーズといえる.

死産を経験した後の妊娠・出産の状況に関する國分[1)]の研究によると，悲嘆から回復した目安とされる「亡くなった人を心痛めることなく思い出すことができる」という状況を迎えた後に，次子の妊娠・出産に移行すれば，過去の死産にほとんど影響されることなく次子との新たな母子関係の形成をして，妊娠中に妊娠への肯定感を抱いたり，出産後に子育ての喜びを語ることができたと述べている．また，悲嘆から回復していない状況のままに次子の妊娠に移行すれば，死産体験が影響して妊娠への肯定感をもてず，次子との新たな母子関係の形成過程に一時的な停滞が起こり，出産後１年以上も次子への関心が薄かったり，あるいは死産児と次子との区別ができずに次子を受け入れにくくなるのではないかと述べている．一方で，花原ら[2)]は，死産後の母親は，死産が受け入れられず，気持ちが切り替えられないという思いの反面，死産後の次子を無事に産んで安心したいという次子妊娠希望への思いも併せもっている.それは死産児を認めることができたという気持ちにも大きく影響し，次子を無事に産めたという体験が，死産に対する悲嘆作業を促進させることや，死産体験の肯定化につながると述べている．また,次子の妊娠･出産で共通して言えることは，母親たちは１人の子どもを失うという死産体験が影響して，常に胎児の死を意識して何が起こるかわからないという再発の怖れを持ち続け，児が無事出生したことにより長い不安の時期から解放されて直後は安心感を得ていたが，その後は児の状態に少しでも変化があると強い不安を感じ，また今回の児も失うのではない

かという再発の恐れが再び出現すると考えられる．そして，出生後何年か経過した後にも，子どもの死を怖れる気持ちが続いて，次子の受け入れに死産児の影響が残っているという母親もいた．これらの研究は，死産児の母親を対象としたものであるが，周産期の喪失として新生児・乳児死亡を経験した母親も存在するため，子どもを予期せず突然亡くしたという点で共通する部分は多いと考える．

このように，周産期に子どもの喪失体験をした母親の心理状態は非常に複雑であり，次子の受け入れに困難を生じることもある．これまで次子の妊娠・出産や次子に対する気持ちや反応の研究は行われてきたが，次子の育児期に焦点を当てて研究されているものは少ない．また，新生児死亡や乳児死亡を経験した母親の育児状況に関する知見も十分ではない. そこで, 今回, 新生児・乳児死亡を経験した母親の語りから，子どもの喪失を体験した後の次子の育児にどのような特徴があるのかを明らかにしていくことを目的とした．このことにより，次子の妊娠中に適切な情報提供を行うなど，助産ケアによって次子の育児期に起こりうる問題を予防することが可能となりうる．また，次子の育児に具体的にどのような継続支援が求められているのか明らかにしていくことで，子どもの喪失体験をした母親の育児期におけるケアを考慮していくうえでの基礎的な資料となると考えた.

調査目的

本研究では，新生児・乳児死亡を経験した母親の語りから，周産期に子どもの喪失を体験した後の次子の育児にどのような特徴があるのか明らかにする.

方法

1．研究協力

子どもを亡くす経験をする前の上の子の育児の経験との比較を通し，共通点や相違点がより明確化できると考え，本研究では，上の子と次子との間に新生児・乳児死亡を経験した母親２名を対象とすることとした.

2．研究期間

平成 23 年 8 ～ 9 月

3．調査方法

本研究では，2 時間程度の半構成的面接を 1 回行い，データを収集した．また，研究協力者には本研究における倫理的な配慮とインタビューガイドを事前に E-mail にて伝えた．会話内容は承諾を得た後に，IC レコーダーに録音し，面接時の母親の表情や態度なども観察内容として記録した.

4．調査内容

先行研究を参考に，死産から次子の妊娠・出産までの経過，亡くなった子どもへの思い，次子の育児，子どもを亡くした母親への援助に関するインタビューガイドを作成し，面接を行った.

5．分析方法

面接内容の録音を逐語録に起こし，Email，電話のやりとりも含め，質問項目ごとに文章にまとめ，それらの共通点を導き出し，次子の育児の特徴について分析した.

6．倫理的配慮

研究協力者には，研究の主旨と研究への協力が自由意思であること, 研究協力への参加, 不参加によって不利益を受けないこと，匿名性を保証し，プライバシーを保護することを事前に文書にて伝え，口頭で同意を得た．面接時には，面接日時や場所は対象者の希望に添うこと，研究中いつでも自由に撤回や辞退できること，不明な点についてはいつでも質問ができることを説明した．また，調査で得られた情報は研究以外には公表しないことや, IC レコーダーに録音した内容については研究以外の目的で使用しないこと，研究後に研究者が責任をもって破棄することを伝えた．また，E-mail でのやりとりの際は誤送信等ないよう細心の留意をした.

結果

研究協力者は A さん，C さんの 2 名で，詳細は表 1 に記載する．A さんは出生後 8 時間で，C さんは出生後 36 日で，児を亡くした．亡くなった児をそれぞれ B と D とする．B および D が亡くなったとき，上の子はどちらも 3 歳であった．また，どちらも流産・死産・新生児死亡を体験した家族のセルフ・ヘルプグループの会に参加している.

なお, 以下説明文のなかに出てくる数字 (1) ～ (29) は 2 名の共通点の根拠となる語りを示したものである．共通点についての具体的な説明は「3．共通点」

で述べる.

表 1. 研究協力者の属性と亡くなった第 2 子の情報

事例	年代	家族構成	亡くなった子ども（第 2 子）
A さん	40 歳代	夫 子ども 2 人	在胎週数 40 週 新生児死亡 （生後 8 時間） 臍帯卵膜付着
C さん	30 歳代	夫 子ども 2 人	在胎週数 38 週 乳児死亡 （生後 36 日） 染色体異常

1．事例 1 ：A さん

1）次男の妊娠に至るまでと，次男の妊娠出産経過

長女出産後の約 3 年後に長男 B を妊娠した．妊娠 40 週に入り出産するが，B は出生後 8 時間で亡くなった．A さんは B が亡くなってすぐに次の子どもがほしいと思ったが，助産師から「あまりあせらないで．生理が何回か来て，それからでもいいんじゃないかな」と言われた．児が亡くなってから約 4 ヶ月後「期間的には短いのかな，それってどうなのかな」と不安を抱きながらも，妊娠を試みた．しかし，なかなか子どもが授からず，不妊治療を専門に行っている産科に通院した．B が亡くなってから約 1 年後に妊娠が判明したが，稽留流産となった．病理検査を受けたが，原因はわからなかった．B の次に妊娠した子も稽留流産という形となり，「稽留流産？流産？またも？自分はもうだめなんだ．もう子どもを生めない体なんだ」という気持ちが強くなり，あきらめの気持ちも湧いてきた．しかし，医師からは「薬を使って早く生理を起こさせて，次の妊娠に向けてやりましょう」と言われた．ひどく落ち込んで気持ちがついていかない状態ではあったが，医師に従って不妊治療を続けながら，次男の妊娠に至った．B が亡くなってから次男を妊娠するまで 2 年の期間が空いた．(1) 次男を妊娠した後は，B と同じような妊娠経過を辿らないように気をつけていた．また同じようになるのではないかと不安で，とにかくトイレに行っては出血を確認したり，胎動があるか常に意識するようにしていた．

2）次男の育児について

(1) 長女の育児と比較して異なる点

長女のときは初めてで，何もわからず，育児書を読みながらこれでいいのかと手探りで型にはまった育て方をしていた．次男のときは，長女と同じようにやっているつもりでも，(2) 育児をしながら，B と重ねてしまうところがあり，寝ている間に次男の呼吸が止まったらどうしよう，寝顔を見ながら朝起きて死んでしまっていたらどうしようなどと，どこかで次男が亡くなってしまうのではないかと考えることがあった．(3) そのような不安な気持ちは 3 歳か 4 歳になるまで感じていたが，次男が大きくなるにつれ小さいときにはないような様々な悩みが出てくることでだんだんと薄れてきていると感じている．しかし，今でも次男がとても元気に活発に動き回っていると，交通事故にあって亡くなってしまうのではないかと考えてしまうことがある．また，育児においても現在はバランスよく長女，B，流産で亡くなった女児，次男の 4 人がいるという感覚があるが，どうしても次男は B と同じ男の子であるために，次男も B と同じように亡くなってしまうのではないかと考えてしまう．そのため，長女より次男のほうに手をかけてしまい，過保護になったり心配性になっていることが多い．それに対して長女がやきもちを焼いているのも感じている．

(2) 次男を B の生まれ変わりだと感じていたか

(4) 次男の妊娠から出産前までは B の生まれ変わりがほしいと強く思い，その思いにすがっていたが，生まれてからはやはり違うのだと気づき，B は B で，生まれてきた次男は次男だと感じるようになった．B の写真の顔と，小さい頃の次男の寝顔を見ていると，とてもよく似ているため，もしかしたら次男が「B の分も 2 人分もらってきたのかな」や，「B がそばにいてくれているのかな」と思うことはあるが，次男を見ているうちに，B はもうこの世にはいないということを徐々に自分でも受け入れていくようになった．また，次男を産んだことで，今まで B にあった思いが少し減り，「助かった，もう不幸なことはなくなった」と思った．B が亡くなってとても悲しかったが，悲しみときちんと向き合ってから妊娠，出産したほうが，亡くなった子どものことをより受け入れていくことができるため，悲しみにはふたをせずに，向き合っていくことが大切であると感じている．

(3) 現在の育児について

次男が物心つくようになってから，B のことを話すようになり，写真を見せたりして「この子は

お兄ちゃんだよ．これは赤ちゃんの写真だけど，赤ちゃんの時にお星さまになっちゃったから，あなたの上にはお兄ちゃん，お姉ちゃんがいるんだよ」と話していた．寝る前にも「お兄ちゃん，お姉ちゃんに挨拶してね」と言うと，次男は長女と一緒に仏壇に手を合わせて拝んでいる．(5) 現在は4人で暮らしているが，亡くなった2人の子どもが一緒にいるような会話をしたり，ケーキなどお菓子を食べるときにも2個多く買ったりするなど，亡くなった子どもが常に自分たちと一緒にいるという気持ちで過ごしている．また (6) 長女と次男には命の大切さを他の人以上にわかってほしいという思いから，花にも，動物にも，何にでも命があり，一つ一つ生まれてきた命には意味があるということ，(7) 命を軽視した発言はしないように教えている．

3）Bに対する思いについて

(8) 次男が元気に遊んでいる姿を見たり，どこかに出かけたり，近所に行って遊ぶときなど普段の日常の中で，Bのことを思い出し，Bがいたらどうなっていたのかと考える．特に，次男が寝ているとき，Bのことを思い出して，「Bは本当は隣にいたんだよな」と強く感じる．(9) Bと同じ男の子なので，次男と重ねて見てしまう部分が多いのかもしれない．次男が小さいときには，寝顔を見ながら「Bもこれくらいだったのかな」と感じたり，次男の体が大きくなっていくのと並行して，「Bもこうなっていたのかな」と比べて追っていることがあり，一緒に育児しているような感覚がある．また，Bがいたら，家庭がもっとにぎやかになっていたのかではないかと考えることもあるが，(10) 次男がとても元気で活発であるため，Bは大人しい子だったのではないかと次男の反対をBに求めている部分もある．次男が小さい時には，次男の育児をしているつもりでも，ふとしたときにBのことを思い出して悲しくなったり，次男を見ながら，「この子はこうやって私たちに可愛がられているけど，亡くなった子どもたちは『いいなぁ』ってどこかで思っているのではないか」と亡くなった子どもたちに悪いという気持ちも感じていた．今はBのことを忘れているわけではないが，次男に気持ちが向いて育児に専念していることが多い．しかし，毎年，命日の月にはBのことを強く思い出して悲しい気持ちになる．

また，(11) Bは長女が3歳のときに亡くなり，長女はBが亡くなった後に対面したが，まだ小さかったために，死というものが理解できておらず，うれしそうにBを見たり，抱っこしたりしていた．(12) 最近になって長女が「私も辛い思いをしたんだよね」と話したことがあり，長女もBが亡くなったということで，Aさんにはあまり言わないだけで辛い思いをしていたのだということに気づいた．

Bを思い出したときの対処については，たとえBのことを思い出しても，その後落ち込んだりはせずに，自分の中にしまっていることが多い．母親としてBを思うことで，Bもうれしいのではないかと感じ，次男を見ながらBを一緒に成長させているという実感も得ている．

4）次男の妊娠・出産・育児に対する専門家からの援助について

Aさんは専門家からの支援は特に何も受けていない．出産して1か月後に，市町村の保健師が訪問に来たが，Bのことには全く触れられなかった．若くて独身の保健師であったため，どのような言葉をかけていいのかわからなかったのではないかと思ったが，Aさんとしては言葉をかけてもらい，少しでも自分の気持ちを聞いてほしかった．

また，参加している家族会のお話会でも，次子を妊娠してから参加する人は少なく，参加していても周囲の人に悪いと思って，次子の育児に関する話題はほとんど出てこない．次子を妊娠・出産した人のみで集まれば，その後の妊娠経過がどうか，育児もどのような気持ちで行っているのかという話もできるが，参加している人の状況が違えばなかなか話すことは難しい．子どもの喪失を経験した後の妊娠・出産・育児は，普通の場合とは異なり，上の子どもの時とは違う不安があるため，専門家からの支援として，いつでも話を聞いてくれたり，相談できるような場所があればいいと感じている．

2．事例2：Cさん

1）次男の妊娠に至るまでと，その妊娠出産経過

Cさんは長女が2歳のとき長男Dを妊娠した．妊娠38週で出生したDは，状態が悪くNICUに

搬送され，生後36日で亡くなった．Dと次男は2歳違いで，次男の妊娠がわかったのがDの1周忌を過ぎたあたりであった．周囲は「すぐ出来たんだね, よかったね」というような感じだったが，Cさんにとっては次男の妊娠がわかるまでの1年間が大変長く感じ，すぐに妊娠してよかったという気持ちにはなれなかった．(13) また，長女はDが亡くなったとき3歳で，NICUでは子どもの面会が制限されていた．NICUに入ることができず，Dが亡くなった後に霊安室での対面となった．長女がDが亡くなったという事実を理解できずに冷たいDを抱っこして「かわいい」とうれしそうに言っている姿を見て，「早くこの子には本当のぬくもりのある赤ちゃんを抱っこさせてあげないといけない」と強く感じた．しかし，Dが亡くなった後，Cさんは家事も長女の世話もできなくなり，食べているつもりでも体重が急激に減りはじめた. 医師からは適応障害と診断され，ずっと通院しながら薬を飲んでいた．Cさんが落ち着いてきた頃に医師から「多分ね, あなたは次に赤ちゃんが生まれることが一番の薬になると思いますよ」と言われ，Cさん自身も不安はあったがそのように感じ，とにかく長女に温かいぬくもりのある赤ちゃんを抱かせてあげたいと思った．その後も幼稚園に行く度に子どもたちを見ては寝込むということを繰り返していた. (14) Dが亡くなってから1年程で次男の妊娠がわかり，そのときはうれしい気持ちもあったが，また同じになるのではないかという恐怖も強かった．生まれるまで1日として安心した日はなく，生まれる前に流産してしまうのではないかとも考えていた．ちょうどその頃に家庭内での揉め事も重なり，切迫早産で入院もした．その時は自分の中でも様々な葛藤があり，家族にもCさんの気持ちを理解してもらうことができず，夫に自分の不安のことであたってしまうこともあった．

2）次男の育児について

(1) 長女の育児と比較して異なる点

長女の時は，それまで姪の世話をしていた経験があったため，育児にも慣れ，楽しく行うことができた．(15) しかし次男の時には，Dと次男の2人を重ねて一緒に見ているような感覚があった．(16) Dには何もしてあげられなかったため，オムツを替えたり，お風呂に入れる時など何をやっているときでも「あぁ, こうやってあげたかったな」という思いが付いてきて，Dも一緒に育児しているような感覚で行ってきた．特に，次男に母乳をあげているときにはいつも涙が出てきて，Dのこともきちんと抱っこをして母乳をあげたかったと感じた．次男の育児では，次男を育てているつもりなのに，どこか客観的に見ている自分がいて，そこが長女の時とは違うと感じていた．育児を行う上で, 長女と同じく行ってきたつもりだったが，Cさんにとっては次男が生まれてから今までとても短い時間に感じられた．

次男が誕生してから，Dが亡くなった日数までは，とにかく不安で気持ちが落ち着かず，「今日を越えればなんとか頑張れる」という思いを強く感じていた．(17) 最初の頃は次男が熱を出すだけで, 真っ青になるほど心配になっていた．(18) また，次男がぐっすり眠っている姿を見ると必ず触ってぬくもりを確かめ，息をしているか確認し，次男が生まれてからもまた亡くなってしまうのではないかという気持ちがあった．(19) 今ではそのような感情も和らぎ，落ち着いてきてはいるものの，気持ちに波があり，情緒が不安定になることもしばしばある．そのような母親の姿は子どもたちに見せてはいけないと感じていた. しかし，Cさんは感情のコントロールがうまくできず，夫とも相談して，情緒が不安定なときには子どもたちに自分がどのような状況なのかを話すようにしている．

(2) 次男を生まれ変わりだと感じていたか

(20) 次男のことをDの生まれ変わりだと思ったことはない．DはDで1か月を生ききって，次男は次男で自分の意思があって生まれてきているから，Dの代わりではないという思いが強かった．(21) Dと次男は顔など似ていると思うが，性格は真逆なのではないかと思っている．

(3) 次男の育児においてうまくいったこと

(22) 次男，長女ともに，命の大切さは他の子どもよりも知っていると感じる．子どもたちにもDのことをたくさん話し，命の大切さや，Dがどのくらい頑張って生きたのかを伝えている．(23) また，Cさんは命を軽視するような発言は絶対に許さない．子どもたちにはよく，Dが出来なかった分何をする時にもDと一緒に行っていると思っ

てやりなさいと話すようにしている．

・現在の育児について：

次男が物心つくようになってからＤのことを話すようになり，次男は幼い時から仏壇を拝んでいる長女の姿もずっと見ていた．(24) 何かもらったり，お菓子を食べるときにもＤの仏壇にあげ，Ｄの誕生日にもケーキを作ってお誕生会をするため，Ｄが生きていて自分たちと一緒にいるような感覚がある．子どもたちもＤのことをよく話し，次男も「うちは５人家族なんだよ．Ｄは先に天国に行っちゃったけどね」と話すことがあり，Ｃさんは兄弟のつながりを強く感じ，Ｄも寂しくないのではないかと思っている．また(25)Ｄが亡くなってから一番大事なことは，利口な子どもになることでも，勉強や運動ができることでもなく，命と時間を大切にして，思う存分生きるということであると感じた．しかし，Ｄのことを話しながら子育てをしていくことは良い面もあるが，子どもたちをずっと縛ってしまうのではないかと感じ，これでいいのかと迷うときがある．

３）Ｄに対する思いについて

(26) 次男を幼稚園の体験教室に通わせているが，そこでＤと同じ年齢の子どもを見ると「Ｄもこんな年になっているのか」，「もし生きていたら染色体にも異常があったからどのくらい大きくなっていたのか」など様々なことを考える．(27) 家の中でも子どもたちは，いつもＤの話をしており，亡くなっているのに一緒にいる感じがした．次男の初節句の時にはこいのぼりを買ってあげたが，こいのぼりをあげることによって天国にいるＤにも見えるのではないかという気持ちになり，次男に買ったはずなのに，Ｄに買ってあげたような気分になることもあった．普段から何をしていても，Ｄのことを思い出して，頭から離れたことがほとんどない．しかし，Ｄがもし頑張って生きていたら，次男はいなかったのかもしれないと複雑な気持ちになることもあり，もしかしたらＤは「僕を育てるのは大変だから」と思って先にいってしまったのかもしれないと感じた．(28) Ｄが何を言いたかったのかはわからないが，そのような思いがあって次男が生まれてきたのなら，次男をＤと一緒に育てているつもりで頑張らないといけないと思った．昔は，雪の季節がとても楽しみだったが，Ｄが生まれてきた季節と亡くなった季節が冬だったため，今でも雪の季節が近づいてくると落ち着かなくなって，苦しくなり薬を飲むことも多い．最近では友人や子どもたちと楽しむこともできるようになってきたが，友人からは「明るいんだけど何かいつも頭のはじっこで考えているよね」と指摘されることがあり，Ｃさん自身とても楽しんでいるつもりなのに常に心の中にＤへの思いがあって，それはこの先もずっと薄れることはないと感じている．Ｄが生きていたのは１か月という短い期間ではあったが，その存在はとても大きく，生きている子どもたちは楽しさをくれるが，Ｄからは生きている子どもたちには教えてもらえないようなことをたくさん教えてもらったと感じる．

Ｄを思い出したときの対処については，以前は我慢しなくてはいけないと思っていたが，最近は我慢せずに思いきり泣くようにし，夫にも自分の思いを話すようにしている．誰かにＤのことを話す機会が多くなると気持ちが落ち着かなくなるが，「Ｄが生きていたことを知ってほしい，頑張って生まれてきたからいなかったことには絶対にしたくない」という思いから，Ｄのことは誰にでも話すようにしている．Ｄが亡くなってから，例えばＤが入院していたNICUでＣさんがしてほしかったことが現在出来るようになったり，アフターケアにも力を入れはじめたという話を聞き，Ｄが他の誰かの役に立ったのだなと感じた．Ｄが生まれてこなければ，子どもを亡くして大変な思いや苦しんでいる母親がたくさんいるということも知らなかったと思う．Ｄのことを話す機会をもらって，Ｄが誰かの役に立っていると思えることがとてもうれしく，Ｄの生きた証を残せるのではないかと感じている．また，長女がいたのであまり現実的ではなかったが，Ｄの近くに行きたいと考えてしまうこともあった．しかし，Ｄの近くに行ってあげることよりも，自分に元気に生きられる命があるなら，Ｄのことを子どもたちや周りの人にも伝えていかないと，Ｄが悲しむのではないかと考えるようになった．

４）次男の妊娠・出産・育児に対する専門家からの援助について

Ｄが亡くなってからしばらくは，両親，兄弟，

夫，友人にも自分の思いを話せず，誰に話したらいいのかわからなかった．どこかカウンセリングをしてくれるところを探し，保健所に行って聞いても情報は得られず，お話会のパンフレットをもらったりもしたが，その時はとにかく話を聞いてくれる人が欲しかった．次男を妊娠してからは，Dを出産したのと同じ病院に通院していたため，Dのことを知っている助産師や医師からいろいろと気を遣ってもらったり励ましてもらったりしていた．次男を出産してからも病院に行き，次男を見せたり，話を聞いてもらったりしていたため，妊娠・出産中には何か援助がほしいとは感じなかった．子どもを亡くした母親に対して，医療者側もどこまで踏み込んでいいのか難しい部分もあるとは思うが，亡くなった子どものことを思い出したくない人，忘れたくない人どちらにしても苦しくなってくると思う．また，すぐに誰かに話すということは考えられなくても，時間が経つことによって誰かに話を聞いてほしいと思うこともある．いざその悩みを誰かに聞いてほしいと思っても，誰に相談したらいいのかわからないため，苦しくなったときにいつでも行ける駆け込み寺のような場所が必要であると思う．話をして，母親自身が前向きになることで，育児に対しても前向きになれるのではないかと感じる．育児においては誰にも相談できずに自分が不安定なときに，子どもにあたってしまうことがあり，Cさんは次男より長女の方が気にかかっている．次男が生まれるまではCさん自身も，次男を育てる方に支障が出るのではないかと不安に思っていたが，次男に対しては自然に過保護になっていた，しかしDが亡くなったことで母親としての気持ちが1度途切れ，その後もDを亡くしたことばかりに気をとらわれ長女に対してうまく出来ない自分がいることに気づいて驚いた．自分を取り戻すことにも時間がかかり，うまく長女を甘えさせてあげることができなくなり，長女に気を遣わせてしまっていることも感じる．また，長女に対してつい厳しくしてしまったり，怒るときにも，Dのことを引き合いに出すことがあるが，誰よりもDのことを思っている長女にはきつい言い方なのではないかと思うことがある．それを6年間解消できずに眠っている長女に「ごめんね．うまくできなくて」といつも謝っている．また，長女はサルのぬいぐるみにDという名前をつけて，いつもそれを抱いて寝ており，Dのことを夢に見て寝言で話していることもあった．(29) 長女もDが亡くなったことで，普通の子どもにはわからないことをたくさん知っている分，言いたいことや悩んでいることもたくさんあるのではないかと感じる．そのため，母親の前だと心配をかけまいとして我慢して言えないこともあると思うので，母親へのケアも大切だが特に専門家による上の子への心のケアの必要性も強く感じる．

3．周産期に子どもを亡くした経験をもつ母親の次子の育児の特徴に関する共通点

周産期に子どもを亡くす経験をもつ母親の次子の育児の特徴に関する共通点をまとめたところ，その育児の特徴として，【悲嘆過程とともに育児をしている】をコアカテゴリーとした【また亡くすという不安の中で育児する】，【亡くなった児を重ねて一緒

表2．周産期に子どもを亡くした母親の次子の育児の特徴に関する共通点

カテゴリー	サブカテゴリー
また亡くすという不安のなかで育児する	すでに妊娠中から始まる不安との戦い＜A－(1)、C－(14)＞ 小さい時ほど亡くなるという不安は強い＜A－(3)、C－(17)(19)＞ 寝ている姿をみると不安になる＜A－(2)、C－(18)＞
亡くなった児を重ねて一緒に育児する	生まれ変わりだとは思っていない＜A－(4)、C－(20)＞ 重ね合わせて成長させている＜A－(9)、C－(15)＞ 2人を一緒に育児している＜A－(9)、C－(16)(28)＞ 次子と反対の姿を想像する＜A－(10)、C－(21)＞ 生きていたらと想像する＜A－(8)、C－(26)＞ 家族の一員である＜A－(5)、C－(24)(27)＞
上の子を思いながら育児する	辛い思いをしている＜A－(12)、C－(29)＞ 通常体験することのない出来事を経験している＜A－(11)、C－(13)＞
命の大切さを誰よりも知ってほしいと願いながら育児する	命の大切さを誰より知ってほしい＜A－(6)、C－(22)(25)＞ 命を軽視するような発言はさせない＜A－(7)、C－(23)＞

に育児する】,【上の子を思いながら育児する】,【命の大切さを誰よりも知ってほしいと願いながら育児する】の４つのカテゴリーが見出された（表2).

このうちコアカテゴリーは，日常生活の中で常に亡くなった児のことを考えながら，自分の子どもを亡くしたという悲嘆過程のなかで次子の育児を行っているという一般的な経産婦とは異なる特徴である。これは,上述した４つのカテゴリーが示す中心的な特徴であった.

以下に，具体的な行動として見出された４つのカテゴリーについて説明を記述する．なお，文中の表記については，コアカテゴリーならびにカテゴリーは【　】，サブカテゴリーは〔　〕で示す.

1）【また亡くなるという不安の中で育児する】

【また亡くなるという不安の中で育児する】は，妊娠が判明したときから，また同じ事になるのではないか，流産してしまうのではないかという〔すでに妊娠中から始まる不安との戦い〕があり，Ａさんはトイレに行くたびに出血の確認をしたり，胎動をチェックして，Ｂと同じような妊娠経過を辿らないように注意していた．Ｃさんは，妊娠が判明したとき，うれしいという気持ちとともに怖いという気持ちがあり，生まれるまで１日として安心したことはなかった．また，次子も亡くなるのではないかという不安は，次子が大きくなるにつれて小さいときにはない悩みが生じることにより，徐々に薄れていくため,〔小さい時ほど亡くなるという不安は強い〕.特に〔寝ている姿をみると不安になる〕ことが多く，児のぬくもりや息をしているかを確認し，呼吸が止まっているのではないか，朝起きたら死んでしまっているのではないかと想像してしまうことがあった．このように，一般的な経産婦が感じる育児不安とは異なる不安を抱えていた.

2）【亡くなった児を重ねて一緒に育児する】

【亡くなった児を重ねて一緒に育児する】は，亡くなった児と次子は同性であり，形ある次子の体を見ながら〔重ね合わせて成長させている〕ことがあった．また，母親として亡くなった児に対して何もしてあげられなかったという気持ちから，何をやっているときでも亡くなった児が一緒にいて，亡くなった児と次子の〔2人を一緒に育児している〕感覚があった．しかし，どちらも現在のところ次子のことを亡くなった児の〔生まれ変わりだとは思っていない〕．Ａさんは，次子が生まれるまで，亡くなった児の生まれ変わりが欲しいと思い，それにすがっている部分もあったが，生まれてから次子を見ているうちに亡くなった児はもうこの世にいないということを受け止め，次子は次子であると感じた．Ｃさんは生まれ変わりだと思ったことはなく，亡くなった児は１か月間を生ききって，次子は自分の意思があって生まれてきたのだから亡くなった児の代わりではないと強く感じていた．また，どちらも，亡くなった児は次子と真逆の性格なのではないかとイメージし，亡くなった児に対して〔次子と反対の姿を想像する〕傾向があった．日常生活の中でも，もし亡くなった児が〔生きていたらと想像する〕ことも多く，Ａさんは空想の兄弟，家族像を考えたり，Ｃさんも同じ年の子どもを見ては，どのくらい大きくなっていたのかなどと考えたりしていた．また，日常生活の中で，亡くなった児の名前が何度も出てくるため，いつも一緒にいて〔家族の一員である〕ように感じていた．しかし，Ａさんは次子が小さいときにふと亡くなった児のことを思い出して悲しくなっては，次子はこうして自分たちにかわいがられているが，亡くなった児はうらやましいと思っているのではないかと考えて，どこかで亡くなった児に対して悪いという気持ちも感じていた.

3）【上の子を思いながら育児する】

【上の子を思いながら育児する】は，上の子はどちらも児が亡くなった時３歳であったため，死というものもまだわかっていない状態ではあったが，幼くして兄弟を亡くすという〔通常体験することのない出来事を経験している〕．そのため，心の中に抱えているものもたくさんあり，傷ついて〔辛い思いをしている〕のではないかと感じていた．Ａさんは上の子が最近になって「私も辛い思いをしたんだよね」と話したことから，上の子も亡くなった児のことで辛い思いをしていたのだと気づいた．Ｃさんも上の子が亡くなった児のことを夢に見たり，ぬいぐるみに亡くなった児の名前をつけて毎晩一緒に寝ている様子を見て，本当は言いたいことや悩んでいることもあるが，母親の前だと我慢して言えないことも多いのではないかと感じていた．また，Ｃさんは，次子が生まれるまで次子を育てる方に何か支障があるのではないかと不安に思っていたが，次子に

対しては自然に過保護になり，上の子に対してうまく出来なくなってしまった自分がいることに気付いた．上の子もＣさんにうまく甘えることができず，気を遣っているように感じられ，上の子との関係性にとまどいながら育児をしていた．

4）【命の大切さを誰よりも知ってほしいと願いながら育児する】

【命の大切さを誰よりも知ってほしいと願いながら育児する】は，亡くなった児のことを子どもたちにはたくさん伝えており，〔命の大切さを誰より知ってほしい〕という思いが強く，〔命を軽視するような発言はさせない〕ようにしていた．Ａさんは命の大切さを他の人以上にわかってほしいという思いから，花にも動物にも何にでも命があること，一つ一つ生まれた命には意味があるということを教えている．Ｃさんは，児を亡くしてから一番大切なことは利口になることでも，勉強や運動ができることでもなく，命と時間を大切にして思う存分生きることであると思い，教育方針が大きく変わった．しかし，亡くなった児の分までと子どもたちを頑張らせすぎていると思う部分もあり，亡くなった児のことを話しながら育児をしていくことは良い面もあるが，子どもたちをずっと縛ってしまうのではないかと考え，これでいいのかと迷いながら育児を行っている．

考察

1．周産期に子どもを亡くした経験をもつ母親の次子の育児の特徴

周産期における子どもの喪失体験後の育児の特徴として，本研究では【悲嘆過程とともに育児をしている】というコアカテゴリーが見出された．これは，日常生活の中で常に亡くなった児のことを考えながら，特に命日が近づくと強く児のことを思い出し，自分の子どもを亡くしたという悲嘆過程のなかで上の子と次子の育児を行うという一般的な経産婦とは異なる特徴であった．子どもの死は，おそらく親の一生のうちで遭遇する唯一の最も傷の深い体験であり，子どもとの死別によって，親は未来に対する希望をなくし，生きがいを求める意欲を失ったり，生きる意欲そのものを失ったりする[5]．周産期喪失の体験者はよく気持ちに波があったり，落ち込みに周期があるというが，命日や出産予定日が近づくと不安が高まるケースが多く，悲嘆過程をたどるのに，数年かまたは一生を要する．それでも確実に危機的状況は過ぎ，徐々に子どもが生きた意味，自分が体験を経て得たものを見つめる方向に向かっていくと述べられている[3]．研究協力者はどちらも児の命日が近づくと児のことを強く思い出し，わが子を失ったという悲しみは月日が経つことによって薄れることはあっても消えることは決してないと語っていた．堀内[3]も子どもの喪失による悲しみは，生涯続く長いプロセスであり，悲しみは決してなくなるものではなく，それは解消するのではなく自分の人生に再統合するのであり，いかによく再統合できたかで，次の子どもの人生は影響を受けると述べている．これらの先行研究でも示唆されているとおり，周産期に子どもを亡くした母親の悲嘆は終わることなくずっと続いていくものであり，複雑で不安定な気持ちのなかで上の子･次子の育児を行っているが，このような現実が医療者全体に浸透しておらず実際のケアに結びついていない．医療者をはじめ一般的にも次の子どもを生むことで，母親たちは子どもを亡くした痛みから回復すると思われているように感じられる．子どもを亡くした母親たちにとっては，次子の妊娠・出産がゴールなのではなく，亡くなった児を思い，悩みながらの育児のスタートなのである．

次に，具体的な行動として見出された【また亡くすという不安の中で育児する】，【亡くなった児を重ねて一緒に育児する】，【上の子を思いながら育児する】，【命の大切さを誰よりも知ってほしいと願いながら育児する】の４つのカテゴリーについて，考察していく．

1）【また亡くすという不安の中で育児する】

研究協力者たちには妊娠中からまた亡くすのではないかという不安がみられ，その不安は次子が生まれてからも続き，特に寝ている姿をみたときに強くなるが，そのような不安は成長に伴って薄れていった．これは，周産期の喪失体験後の悲嘆過程を示したHenseの４つの心理過程のうち『再発への恐れ』として前回死産を経験したことにより母親が今回の妊娠に死産が再現することだけでなく「また何か悪いことが自分やこの子どもに起こるのではないか」と思うことに通ずるもので，死産を経験した両親・家族は再び妊娠したとき同様のことが生じるのではないかという強い不安を抱くと言われている[4]．そ

れは新生児・乳児死亡を経験した母親にも言えることで，研究協力者はどちらも妊娠期から現在まで，また子どもを亡くすのではないかという不安を抱えているということがわかった．また，Cさんは，次男が誕生してから児が亡くなった日数までは，とにかく不安で気持ちが落ち着かず，「今日を越えればなんとか頑張れる」という思いを強く感じていた．死産した場合でも，死産した週数に至るまでは長く感じ，超えると気持ちが楽になったという思いが表出され，死産した時期を越えるということは，死産を体験した母親にとって大きな壁であり，越えることには意味があること[2]が述べられている．このように新生児・乳児死亡を経験した場合でも，亡くなった子どもの日数を超えるということは母親にとって大きな壁であるということが示された．本研究ではそのような『再発への恐れ』が，次子が生まれてからもしばらく続き，次子の成長に伴って薄れていくということが明らかになった．しかしAさんは次子が6歳になった今でも，次子が交通事故にあって亡くなってしまうのではないかと考えることがある。Cさんも次子が3歳になった今でも，次子の寝顔を見ながら生きているのか確認するというような行動を繰り返していることから，そのような不安な気持ちは薄れていくことはあっても消えていくものではないということがわかった．このように母親たちは亡くなった児のことを思い，一般的な経産婦が感じている育児不安とは明らかに異なる不安を抱えながら次子の育児を行っているということが明らかになった．

2）【亡くなった児を重ねて一緒に育児する】

研究協力者たちは亡くなった児と次子が同性であることから重ね合わせて成長させており，亡くなった児に対して母親として何も出来なかったという気持ちから，何をやっているときでも亡くなった児が一緒にいて，次子と一緒に育児しているという感覚があった．これは，悲嘆過程を辿っていくなかで児のことを思い出し，亡くなった児に対して母親らしいことをしてあげたかったという強い気持ちの表れであると考えられる．日常生活ではどちらもふとしたことから亡くなった児が生きていたらと想像し，その度に児はもうこの世にはいないのだと児が亡くなったことを実感している．また，亡くなった児の名前が家族のなかで何度も出てくるため，家族の一員としていつも一緒にいるように感じており，亡くなった児を含めた関係が形作られていた．亡くなった児を思い出して悲しい気持ちにならないように家族内で亡くなった児についての話題を避けてしまう人たちもいる中で，生きているうちに出会ったことのない子どもたちまでもが，その存在を感じ自然に自分たちのきょうだいとして認め，深い絆で結ばれているように思われた．しかし，Aさんは一緒に育児しているつもりでも，次子はこうして自分たちにかわいがられているが，亡くなった児はうらやましいと思っているのではないかと考え，どこかで亡くなった児に対して悪いという気持ちも感じながら，複雑な思いの中で育児を行っていた．

また，亡くなった児を次子に重ねてみている感覚はあるものの，研究協力者はどちらも現在は次子を亡くなった児の生まれ変わりとは思っておらず，亡くなった児とは異なる独自の人格を有する子どもとして区別していた．どちらも亡くなった児に対して次子の反対を求める傾向があることは，亡くなった児と次子が全く別の個人として認めることができているということを示している．しかしAさんは次子が生まれるまで亡くなった児の生まれ変わりが早く欲しいと思っており，生まれてから次子を見ているうちに亡くなった児はもうこの世にいないのだということを受け止め，次子は次子であると感じていた．一方でCさんは次子を生まれ変わりだと思ったことは一度もなく，亡くなった児は1か月間を生ききって，次子は自分の意思があって生まれてきたのだから亡くなった児の代わりではないと強く感じ，妊娠した時から次子を別の個人であると認めていた．AさんとCさんには次子を生まれ変わりと認識していたかという点で違いはあるが，どちらも，國分[1]が指摘しているように，『代替への試み』として，得ることができなかった子どもの存在や母親役割を取り戻そうと妊娠し，出産後までに次子とは異なる子どもであると気がつき，その気づきを得ることによって亡くなった児と次子という2人の子どもを区別して，『次子へのマザリング』に取り組み，‘次子を受け入れる’というプロセスを辿っていた．このプロセスは次子との新たな母子関係を形成するために必要であると言われている．今回の研究協力者たちの間には次子を生まれ変わりと認識していたかという点で違いがあったが，これは亡くした時期や悲嘆過程の段階，協力者の性格や環境によるもの

が関係していると考えられ，生まれ変わりかどうかの認識には個別性があることを示している．なかには次子のことを亡くなった児の生まれ変わりだと思いながら育児している人たちもいて，昔はそのような考え方は否定されていたが，上記で國分[1]が示すような次子を受け入れるプロセスを辿っている途中にあり，周囲が一概にその良し悪しを評価すべきではないと考えられる．次子を亡くなった児の生まれ変わりと思い，次子を受け入れるプロセスを辿っている人たちこそ，その悲嘆過程を長い目で見守っていく必要があるのではないかと思われる．

このように母親たちは亡くなった児に対して母親らしいことをしてあげたかったという強い思いから，亡くなった児に思いを馳せ，喪失体験を実感しながらも，次子と亡くなった児を重ね合わせて一緒に育児を行っている．そのため，ここでも最初に述べたように周産期に子どもを亡くした母親の悲嘆は終わることなくずっと続いていくものであり，複雑で不安定な気持ちのなかで次子の育児を行っているということが示唆された．

3）【上の子を思いながら育児する】

本研究では母親と同じく上の子も，家族の悲しみをみたり，幼くしてきょうだいの死に触れ，通常体験することのない出来事を経験しており，口には出さないだけでいろいろな思いを抱えて傷ついているということがわかった．先行研究では上の子について触れられているものはほとんどなく，子どもを亡くした母親だけではなく，きょうだいを亡くした上の子にも目を向け，心のケアを行っていく必要があるということが示唆された．また，Cさんは児を亡くした後から，上の子に対してうまく育児ができなくなったことに気づき，上の子もCさんに対してうまく甘えることができず，気を遣っている部分がある．次子との関係性については，國分[1]が子どもを亡くした悲嘆から回復していない状況のまま次子の妊娠に移行した場合，次子との新たな母子関係の形成過程に一時的な停滞が起こり，出生後1年以上も次子への関心が薄かったり，あるいは亡くなった児との区別がつかずに次子を受け入れにくかったと指摘している．しかし，本研究では，Cさんのように児を亡くしたことにより，母親としての気持ちが一度途切れてしまい，次子だけでなく上の子との関係性にとまどうこともあるということが示唆された．今後は次子との関係性だけではなく，上の子との関係性にも注目して母子関係をスムーズに構築していけるような支援も必要であると考えられる．

4）【命の大切さを誰よりも知ってほしいと願いながら育児する】

研究対象者はどちらも亡くなった児のことを子どもたちにはたくさん伝えて，亡くなった児の存在や生きた証を残していきたいと考えていた．特に，命を軽視するような発言をしたときには厳しく叱り，子どもたちには命を軽々しく考えてほしくないという思いを抱いていた．亡くなった子どもを思う親の気持ちは，周囲の想像をはるかに超える強いものであり[5]，子どもを亡くした経験を通して母親自身も命の大切さを実感し，子どもたちには亡くなった児の分まで誰よりも命を大切に生きてほしいという強い思いがこめられていると考えられる．

さらに，Cさんは子どもたちに対して亡くなった児の分まで命を大切に生きてほしいと強く思いすぎて，子どもたちを頑張らせてしまっているのではないかと思う部分もある．亡くなった児のことを話しながら育児を行っていくことは多くの良い面もあるが，子どもたちをずっと縛ってしまうのではないかと考え，これでいいのかと複雑な心境のなかで葛藤し悩みながら育児を行っているということがわかった．

2. 看護の示唆

本研究において，母親の亡くなった児への思いは消えることはなく，悲嘆過程のなかで子どもたちの育児を行っていくということが明らかになった．先行研究によると，死産から次の妊娠・出産までを一連の出来事としてとらえ，死産後の悲嘆から回復した後に次子の妊娠・出産に移行して次子との新たな母子関係を築けるような継続した支援が必要であると述べていた[1]が，喪失後1か月健診を終えた後は医療者とほとんど接する機会がなくなる日本では，このような不安や悩みを相談できる機会が少ないのが現状である[3]．次子との関係を築けた後も，母親は複雑な思いの中で育児を行っているため，例えば新生児訪問指導，電話相談，乳児健診時に子どもを亡くした母親の思いに配慮して傾聴したり，気持ちを理解した声かけを行っていくなど継続して関わっていくことが必要である．

また，堀内[3]は「病的悲嘆を予防するという視点からも，喪失体験者が安心して語れる時間と場を提供することは極めて重要である」と他者に話すことの重要性を述べている．当事者の会でも次子への妊娠・出産・育児については参加している人の過程が違えば話すことが難しい内容であるため，何かあったときにすぐに相談したり，自分の気持ちを話せる場所が必要であると考えられる．

しかし，子どもを亡くした母親への支援は最近になってようやく目を向けられるようになってきており，医療に携わっている専門職の中にも子どもを亡くすという辛さや悲しみがわからないというような認知不足が多いことが現状にあるために，子どもを亡くした母親への育児支援を行っていくのは難しい状況にある．そのため，まずは次子を産んだ後も母親はわが子を亡くしたという悲嘆過程とともに，複雑で不安定な思いを抱えながら育児を行っているということを専門職や周囲の人々が理解していく必要がある．

3．本研究の限界と今後の課題

本研究では２名の新生児・乳児死亡を経験した母親の面接調査を実施し，次子の育児の特徴について把握した．しかし，特定の地域であり，対象人数が少ないという点においては限界があり，今後も事例を重ねていく必要がある．

結論

周産期に子どもを亡くした経験をもつ母親の次子の育児の特徴は，【悲嘆過程とともに育児をしている】をコアカテゴリーとした【また亡くすという不安の中で育児する】，【亡くなった児を重ねて一緒に育児する】，【上の子を思いながら育児する】，【命の大切さを誰よりも知ってほしいと願いなが育児する】の４つのカテゴリーで構成されていた．

これは，日常生活の中で常に亡くなった児のことを考えながら，特に命日が近づくと強く児のことを思い出し，自分の子どもを亡くしたという悲嘆過程のなかで次子の育児を行うという一般的な経産婦とは異なる特徴であった．看護の示唆としては，そのような複雑で不安定な思いの中で育児を行っているという現状を理解し，育児への継続的な支援や何かあったときにすぐに相談したり，気持ちを傾聴してくれるような場所が必要であると考えられた．

おわりに

本研究では，新生児・乳児死亡を経験した母親の語りから，周産期の子どもの喪失体験後の次子の育児にどのような特徴があるのかを明らかにすることを目的とした．その結果，母親の亡くなった児への思いは消えることはなく，悲嘆過程のなかで子どもたちの育児を行っているということが明らかになった．今後はそのような母親に対して妊娠・出産だけでなく，専門職や周囲の人々がそのような現状を理解し，育児への継続的な支援や，何かあったときにすぐに相談したり自分の気持ちを話せるような場所が必要であるということが示唆された．

謝辞

本研究を行うにあたり，面接を快く引き受けてご協力いただいたお母様方に深く感謝申し上げます．なお、本研究は，平成23年度岩手県立大学看護学部卒業論文として提出した内容の一部を修正・加筆したものである．

引用文献

1）國分真佐代．死産を体験した母親の次の妊娠・出産に関する研究―母親の次子と死産児への気持ちや反応―．母性衛生 2006；46（4）：515-523.

2）花原恭子．玉里八重子．岡山久代．死産を体験し，次子出産した褥婦の死産に対する思い．滋賀母性衛生学会誌2008；8（1）：67-72.

3）堀内祥子．周産期喪失と病的悲嘆．助産雑誌 2006；60（11）：964-966.

4）西岡恵美．池谷みゆき．子宮内胎児死亡を経験後の妊娠・分娩・産褥期のケアのあり方について－Hense モデルの心理分析を用いて－．静岡赤十字病院研究報 2006；26（1），6-11.

5）ジョージ M．バーネル，エイドリエン L．バーネル．亡くした人の違いと死別，死別の悲しみの臨床．第１版．長谷川浩，川野雅資．東京：医学書院；1994．67-87.

（2014年４月２日受付，2014年５月２日受理）

<Research Report>

The Features of the Following Child Care after Perinatal Loss

Shizuka Ito[1)], Natsuko Kakizaki[2)]
1) Tokyo Medical University Hospital, 2) Iwate Prefectural University

Key words: perinatal loss, pregnancy of the following child, child care, grief process